紅山文化と中国北方文明の起源について

徐　　子　峰

摘要

黄河流域は中華文明の揺籃の地であり、中華文明発祥の中心である。この理論は、考古学研究の発展と深化に伴い、特に1970年代以降全国各地で新しい発見が次々と世に問われるにつれて、「満天の星」説という重大な挑戦に直面した。

研究によると、中華文明の発生と形成は主に三つの地域に端を発するとされている。それは南方の長江流域、中原の黄河地域、北方の遼河流域である。そして北方の紅山文化が有する豊富な内容と独特な文化の様相は、西遼河流域が中華民族の重要な発祥地の一つであり、また、中国北方文明の重要な源であることを有力に証明している。

紅山文化が新石器時代、特に中華文明の起源における重要な地位を確立したのは2回の転機があったからである。その1つは紅山文化の玉器確認の研究であり、もう1つは紅山文化の壇と廟と塚の発見である。

紅山文化の後期に出現した東山嘴祭壇と牛河梁女神廟、積石墓の巨大な「ピラミッド式」建築は、紅山文化と中国文明の起源に関する新しい内容を加えた。また、紅山文化が中華文明の起源と密接に関係した中国北方文化として重要であることが判明した。

紅山文化の成熟した玉器の組み合わせと玉器の文化群、紅山文化の壇、廟、塚が示すのは、巨大な社会機能と厳密に組織された管理秩序と文化レベルであり、紅山文化がすでに文明時代へと接近していたことを確信させる。

紅山大地の文明の光はまさに、神権と族権とが結合した独特の方式をとって太古の西遼河流域に出現したのである。

1．中華文明の起源問題

中華文明の起源問題は近年の学界が注目するホットな話題の一つで、学者たちは歴史学や考古学、人類学、民俗学といった各方面から着目し、中華文明の起源と形成過程について幾度となく検討を試みてきた。そして、そこから歴史的真実の過程を復元する糸口を探ってきた。しかし、歴史上かなり長い期間、中華文明の起源問題は一元論によって独占されてきた。歴史学界のみならず、考古学界においても、黄河流域が中華文明の揺籃の地であり、中華文明の起源の中心であると伝統的に認識されてきたのである。

このような理論が支持されるなか、わが国960万㎢の範囲の中では、黄河流域以外の周

辺地域の文化は、すべて黄河流域文化の影響によって発生したか、あるいは発展してきたと考えられてきた。しかし、考古学研究の発展と深化が進むにつれて、特に1970年代以降の全国各地における新しい考古学的発見は、中華文明の起源が多元一体的構造をなしているとする客観的事実を証明し、黄河揺籃説は「満天の星」説の重要な挑戦に直面するようになった。

そして紅山文化は、中国北方と長城地帯の重要な新石器時代の文化として、また、こうした理論の背景として、もっとも重要視されたのである。特に紅山文化の壇、廟、塚の発見は、紅山文化の内容が豊かであったことを明らかにし、紅山文化が展開する燕山南北と長城地帯が同様に中華文明の重要な発祥地の一つであることを証明するものとなった。

それでは、紅山文化とは、どのような文化であるのか。北は西拉沐淪河（シラムレンかわ）流域、南は渤海海岸、西は華北北部、東は遼寧西部まで分布するこの新石器時代文化は、これまでほとんど知られることがなかったが、今日、次第に認識されるようになってきた。紅山文化と遼河文明の起源はまた、野外考古学の調査の進展によって、その趨勢と発展の脈絡が日増しに明らかになってきている。

写真１．紅山文化を育んだシラムレン河の風景

2．紅山文化の発見とその意義

紅山文化の遺物が最も早く発見されたのは1935年である。1954年には著名な考古学者、尹達先生によって正式に「紅山文化」と命名された。彩陶と打製石器、磨製石器、細石器が共存した新石器時代文化が長城以北から発見されたことは、国内外の学者の注目を集めた。新中国成立以降、紅山文化の分布範囲や内容、年代および特徴などについて多くの研究が行われてきたが、その文化の性質と来源については考古学界でも意見が一致していなかった。

1940年代には「混合文化」とも呼ばれ、1960年代以降は、ある学者が仰韶文化と河北磁山文化の影響を受けたものであると強調した。実際、紅山文化の性格と内容について、ある考古学者は次のように説いた。

「中国古代文化には二つの重要な区系がある。一つは謂河流域を源とする仰韶文化、もう一つは大凌河流域を源とする紅山文化である。これらはともにそれぞれのルーツとシンボルを持つ。両者が出現し、形成された時期は今から約6000年から7000年前である。また、ともにそれぞれの祖先から派生、あるいは分裂したものであり、仰韶文化のシンボルはバラ（ハマナス）、一方の紅山文化のシンボルは龍である」[1]。

つまり紅山文化には南北の文化が結合した特徴があり、鋤を代表とする発達した石器群は学者の注目を集め、紅山文化はさらにしっかりとした歴史的文化的背景を持つものとして認識されてきた。また、紅山文化は新石器時代、特に中華文明の起源において重要な地位を占めるようになった。それには２回の転機を経ている。1つは紅山文化の玉器の確認とそれに関する一層進んだ研究であり、もう1つは紅山文化の壇と廟と塚の発見である。

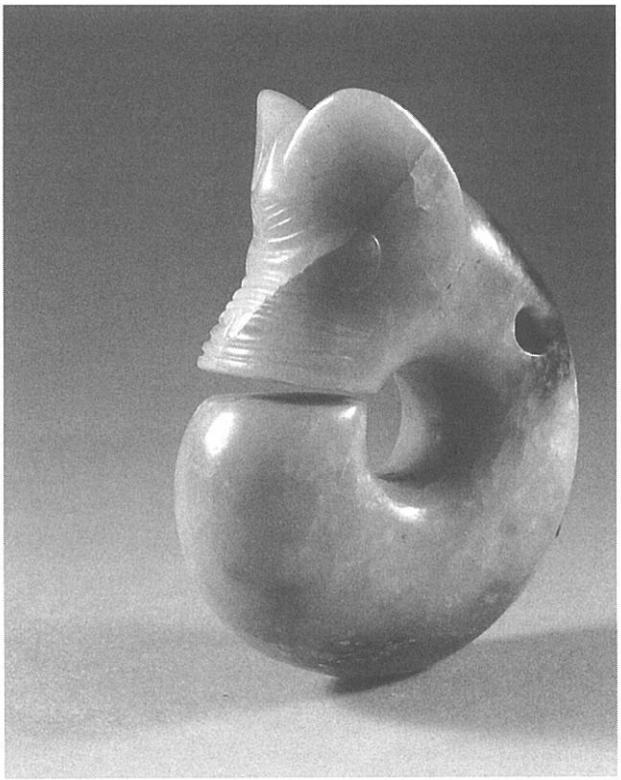

写真2．玉龍（牛河梁第2地点1号塚4号墓出土。高さ10.3㎝）

紅山文化のルーツと性格について、今日、以下の観点から論じられている。

1．紅山文化は、仰韶文化系統の原始文化であるか、もしくは仰韶文化の地方的バリエーションである。2．紅山文化は、河北の磁山文化を継承